

「ブタと言われた」

前回は、いじめの実態や取り組みについて述べてきました。今回は、いじめを解消し、まだ起こさないために、私たちは何をすべきなのか考えてみましょう。

テレビや新聞で、いじめによって命が奪われるというニュースが報じられることがあります。まず、いじめは人権や命に関わる重大な問題であること捉える必要があります。

「人権学習をしているのに、なぜいじめがあるのか?」「いじめめるのも悪いがいじめられる方も悪い」という疑問や意見を聞くことがあります。果たして、このような思いでいじめは解消できるのでしょうか。

学校では、人権に関する学習で「いじめの問題」「部落差別の問題」「水俣病に関する問題」「ハンセン病元患者の方々に対する問題」など、さまざまな人権問題について、それぞれの学年に応じた学習を進めています。

その人権学習では、**自己変容(心の変わり目)を促す場面が多くあります。**

ある学級で、少し太った友達に「ブタ」と言って意地悪をする

という事件が起きました。身体的なことでも相手をいじめることがどうしていけないのか考えさせながら学習をしています。

しかし、いじめはなかなか改善されません。そこで、養豚の現地見学に行く取り組みをしました。

最初は「へい・きたない」とマイナスイ面を捉えて、おそろおそろ豚舎に入っていた子どもたちも、子豚を見ては「かわいい」「ちよつと触りたい」と愛着を感じはじめ、飼育農家の方の話を熱心に聞き取っていきます。

そんな中で意地悪をしていた子ども、身体の特徴や外見でめつけて、いじめや人を傷つけることが、間違いであると、自分の偏見に気づいていきます。

見学後、その子だけでなく、学級の子もたちが目に見えて変わっていきました。

何が心の変わり目になったのでしょうか

「ブタはきれい好きであること・家族と同じように大事に育てられていること・病気になるまで死んでいくとき、家族全員が涙を流すこと」など、自分の耳



で聞き、目で見て、手で触れる体験をする中で、目の前の事実を心を揺さぶられ、自己変容していったのです。

いじめや差別事象では、予断と偏見、きめつけなど、本当のことを知らないことで人を傷つけている場合が多くあります。いじめや差別に対して、口ごもるから「自分ではないのだらうか」「相手が悩んでいるのは何故だらうか」「本当はどうなんだらうか」、一人ひとりが自分のこととして意識し、行動することでお互いの理解につながり、いじめや差別のない、みんなが暮らしやすい町になっていくのではないのでしょうか。

益城町教育委員会

地名の歴史

歴史の変遷と地名

矢嶋姉妹周辺

〔前号〕に続けて、四孝子碑の碑文の後半を掲載。
 「四人はか年での業爾阿行
 尔野尔あ連山にあれ必一所
 尔有て更尔遍多(※1)つる
 事なし、そは母の身にとみ
 (※2)の事有らん時速尔一
 時尔寄りあわんが為なりと
 ぞ。義心越用いる事浅から
 ぬ事尔ぞ有りける古登つぶ
 さに官に聞かして、貞享二年
 六月兄弟四人共尔米三俵宛
 年毎に贈里て其孝を賞し玉
 ひぬ。かくて宝永二年の夏母
 歳九十三尔して身まかり介
 れ八葬追善心のかぎりいと
 なして、各賜る所の米をも辞
 奉るべきよし申出ぬ連どそ
 の母に賜へるにあら須孝子
 を賞し玉へる奈連は其儘に
 受奉へき由仰下されぬ登な
 ん。此四人兄を伝之允、次を
 半兵衛、又其次を宗兵衛、季
 越(※3)四兵衛といひ介る、
 伝之允八妻の母をも己の家

尔養ひてよく勞里しとなん。
 詳奈るこ登八中村正尊の著
 せる肥後孝子伝尔阿行。今
 かく阿らましを石に鐫つけ
 (※4)物しぬるは此郷にか
 かる稀奈る孝子共の阿りし
 事を千歳の後にも朽せ志め
 ぬか為尔そありな舞。
 時八弘化四年七月

「四孝子の碑の文か介るとて
 天地の共尔久しくたらちね
 の 於やに都可へし名こそ
 朽ちせ祢」 直方

「を奈しく碑越建るとて たらち祢尔都かへ介る名の
 朽せめや身は糸原の露とき
 えても」 直明

《原文には句読点は全くない
 ため、筆者が適宜句読点を
 挿入》

- ※1 編多つる=隔つる
- ※2 とみ=頼とみ↓にわか
- ※3 季越=末
- ※4 鐫つけ=彫りつけ

益城町文化財を訪ねる会
 会長 松野國策



四孝子碑の碑文 (一部抜粋)